

15 「芸人の町・片江」顕彰板

東成区片江町内にあった自宅を「楽語荘」と名づけ、上方落語の保存と新人落語家の養成に乗り出しました。

五代目松鶴は、「楽語荘」において、私財を投じて雑誌「上方はなし」を発刊、当時の四代目松鶴の松翁、桂米團治、花団治などが同人として集い、「上方はなしを聴く会」を催すなど、上方落語の再興に尽力しました。

多くの芸人が住んだ「片江」の歴史を後世に伝えるために平成22年顕彰板が設置されました。

昭和初期、五代目笑福亭松鶴は、横山エンタツ、花菱アチャコらの漫才に押され凋落傾向にあった落語を憂い、大阪市

即位式や、伊勢神宮の式年遷宮（20年に一度）に用いられる儀式用の大きな菅笠は、代々この地から調達されていました。江戸時代中頃からは、伊勢参りが盛んとなり一般道中の菅笠が世に知られるようになりました。

深江稻荷神社の別名（鑄物御祖）神社とある。11月28日夜、火焚祭があり深江や東大阪の布施などが鑄物工業の発達した地帯であることを示しているようです。

現在、深江稻荷神社内が「笠縫邑跡」として大阪府史跡に指定されています。また大阪市の顕彰碑「深江菅笠ゆかりの地」が建てられています。

現在も菅細工の保存活動を続けている「深江菅細工保存会」が、平成11年から始まつた「大阪市指定文化財」の最初に指定を受けています。

16 二軒茶屋・石橋

江戸時代から暗越奈良街道は人の往来も盛んとなり、この街道沿いの玉造に「鶴屋」「樹屋」という二軒の茶屋が建てられ、旅人などの休息の場として繁盛したと伝えられています。

当時の玉造は旧市街のはずれで、旅人はここで旅装を整え、家族・友人の見送りを受けていた。茶屋が二軒あったところから“二軒茶屋”といわれ世に広く知れわりました。

この二軒茶屋のそばを流れていた猫闇川に慶安3年（1650）に幕府の命によって橋が架けられ、宝永8年（1711）には石橋に架け替えられました。正式には黒門橋というが、大坂城の玉造門がこの付近にあり、それが黒かったことから黒門の名がつけられたとのことで、その黒門は天王寺の一心寺の寺門として移築されたと伝えられています。当時珍しく石で造られたので通称“石橋”と呼ばれていたが、その後大正13年に石橋は撤去された。石橋の廃石を現在、八阪神社で境内の狛犬や石灯籠の台石、記念碑に、また八王子神社では記念碑に転用しています。

現在、JR玉造駅の東路上に玉造名所 二軒茶屋・石橋旧跡の碑が建っており、大阪市の顕彰史跡に指定されています。



二軒茶屋・石橋

17 深江稻荷神社と菅笠

が名所」と伊勢音頭の一節にあるように、深江は菅笠の産地として有名でした。

本居宣長の玉勝間に「笠縫島は今攝津國東生郡（現東成区）の深江村といえる所なるべし…」と書かれています。

古代垂仁天皇のころ、笠を縫うことを職業とした笠縫氏の一族が、大和の笠縫邑から良質の菅の生い茂った深江の地に集団移住して、代々菅笠をつくったことから笠縫島の地名がうまれた。その歴史は2千年前になります。

古くは全戸が笠造りに従事し、明治の初めには外国にも輸出され、また歴代天皇の御



深江菅笠ゆかりの地  
笠縫邑跡

18 胞衣塚

垂仁天皇2年に創建されたとされる比売許曾神社にまつられている、大小橋命の胞衣を納めた塚と伝えられている。大小橋命は、天児屋根命の13世の裔孫、神功皇后の近親雷大臣の子で、藤原鎌足は大小橋命10世の孫であるといわれています。

後世、この塚に植えられた柳が子供の夜泣き封じに効能があると伝承されてから、“胞衣塚”が“よな塚”と呼ばれ広く知れわたった。

昔平野川がこの“胞衣塚”的すぐ横を流れていたので、柳が植えられよく育ったことと想像されます。



19 安堵の辻

深江の法明寺に残されている安堵の御影 緣起（法明上人の弟の西願が、沙弥教信と法明上人がお話されているところを描いた図）によると、貞和4年（1348）の春突如として空中に紫の雲が現れ、その雲から尊い僧、沙弥教信が姿を現し法明上人に向かって「あなたは永年念佛を唱えながら、人々を助けてこられました。おかげで来年の6月16日の朝、極楽へ安らかに旅立つことができるでしょう」と。上人はよいお告げを聞いたと喜びお告げどおり、その日に亡くなった。

その尊い僧に法明上人が出会ったところが辻だったので、この辻を“安堵の辻”と呼ぶようになったと伝えられています。

20 歳の神

悪霊の侵入を防ぐため村境・辻などにまつられる神で、墓の神・障の神（道祖神）ともいう。

一般には道祖神と呼ばれ、疫病や災禍を防ぐ神とされています。ここにおまつりする歳の神は、天正11年（1583）豊臣秀吉が大坂城の築城に際し、その護り神として城を囲む周辺におまつりしたもの一つと伝えられています。

